

あるとき、牛が森を歩いていました。すると、ひつじに会いました。

「どこへ行くのかね、ひつじくん」と、牛はたずねました。

「冬を避けて夏を探しに行くんです」と、ひつじは答えました。

「じゃあ、ぼくもいっしょに行こう」と、牛はいいました。

ふたりが歩いて行くと、ぶたに会いました。

「どこへ行くのかね、ぶたくん」

「冬を避けて夏を探しに行くんです」

「ぼくらといっしょに行かないか」

そこで、ぶたも後からついて来ました。

三人が歩いて行くと、にわとりに会いました。

「どこへ行くのかね、にわとりくん」

「冬を避けて夏を探しに行くんです」

「ぼくらといっしょに行かないか」

そこで、にわとりも後からついて来ました。

みんなは、歩きながら、

「じきに冷たい冬がやって来る。なんとかしなくちゃ」と相談しました。牛がいました。

「ここえてしまわないように、みんなで小屋を作ろう」

ひつじは、

「ぼくは、こんなにもくもくあったかい毛皮を着てるからね。このままで冬を越せるよ」といいました。ぶたは、

「ぼくは、地面に穴を掘れば、どんな寒さもへっちゃらさ。このままで冬を越せるよ」といいました。にわとりは、

「ぼくは、羽にくるまっていれば、どんな寒さも感じない。このままで冬を越せるよ」といいました。牛は、

「それなら、好きにしたまえ。ぼくは、小屋を建てるとしよう」といいました。そして、自分の小屋を作って、そこで暮らしはじめました。

やがて、冷たい冬がやって来ました。ひつじは、寒くてがまんできなくなって、牛の所にやって来ました。

「中へ入れて温まらせておくれ」

「いやだよ、ひつじくん。きみはあったかい毛皮を着てるんだ。そのまま冬を越したまえ」

「入れてくれないなら、小屋の壁をつきくずしてやる」

「じゃあ、しかたがない」

牛はそういつて、ひつじを小屋に入れてやりました。

そこへ、ぶたが、寒さにふるえあがって、牛の所にやって来ました。

「中へ入れて温まらせておくれ」

「いやだよ、ぶたくん。きみは地面に穴を掘って、そこで冬を越したまえ」

「入れてくれないなら、小屋の柱を掘りかえしてやる」

「じゃあ、しかたがない」

牛は、ぶたを小屋に入れてやりました。

そこへ、にわとりが、やって来ました。

「中へ入れて温まらせておくれ」

「いやだよ、にわとりくん。きみは、羽にくるまって、冬を越したまえ」

「入れてくれないなら、壁の丸太のあいだにつめたこけをつつき出してやる」

「じゃあ、しかたがない」

牛は、にわとりも、小屋に入れてやりました。こうして、動物たちは、小屋の中で、ぬくぬくと気楽に暮らしました。

ある日、きつねが、小屋を見つけました。そつとのぞくと、牛と、ひつじと、ぶたと、にわとりがいました。きつねはすぐに、くまとおおかみの所に走って行っていいました。

「いい物を見つけましたよ。くまさんには牛、おおかみさんにはひつじとぶた、わたしにはにわとりをね」

「そいつはけっこうだ、きつねくん」

きつねは、ふたりを小屋に連れて行っていいました。

「くまさん、戸を開けてください。わたしが真っ先に飛びこんで、にわとりを食べてしましましょう」

くまが戸を開けると、きつねは中に飛びこみました。すると、牛がつのでつきかかり、ひつじが頭突^{ずっ}きを食らわしました。きつねは、のびてしまいました。

おおかみは、

「きつねのやつ、何を手間どってるんだろう。くまさん、戸を開けてくれ。今度はぼくが行くから」といいました。くまが戸を開けると、おおかみは中に飛びこみました。牛がつのでつきかかり、ひつじが頭突きを食らわしました。おおかみものびてしまいました。

くまは、長いこと待ってから、

「ふたりとも、何を手間どってるんだろう。今度はおれが行ってみよう」といって、中に飛びこみました。すると、牛がつのでつきかかり、ひつじが頭突きを食らわしました。くまはやつとのことで小屋を飛び出して、いちもくさんに逃げて行きましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『ロシアの民話上』中村喜和訳／岩波書店